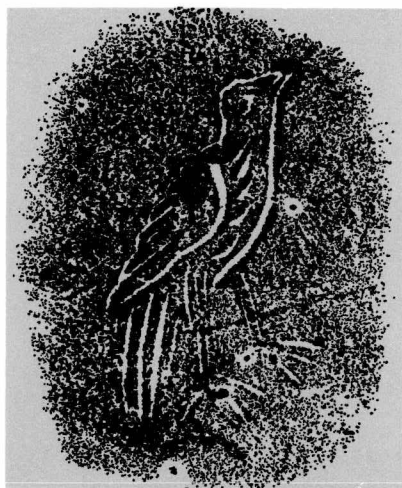


小川國夫
作品
佳本
池

小川国夫作品集 第六卷



小川國夫作品集 第六卷

昭和五十年四月十日印刷
昭和五十年四月十五日発行

著者 小川國夫
装幀者 司修
発行者 中島隆之

発行所 河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三の六
電話 (〇三)(二九二)三七一一
振替 東京一〇八〇二

印刷 暁印刷
製本 大口製本

定価はカバー・帯を御覧下さい

小川國夫作品集 第六卷

目次

私の文学観

読書遍歴 13

治癒力 15

好きな場所 20

青春の読書 20

作家のふるさと 22

消えた小説 27

インタービュー 33

人間の中の自然 40

建物の石 41

なぜ書くかなぜ書かないか 43

文体 45

朽ちない冠 47

書きたくないこと 47

言葉の星座 48

命への考察 51

通勤の道で 59

よすが 60

紀行と所感

貧しい青年 67

オリンピア 67

泉伝説 72

人種的偏見 74

ヴィキング 77

愛と憎みの顔 78

教養 78

青銅時代 79

逝ける渡辺克己に 80

現代豆本館 81

金嬉老事件 84

テレビは冷淡に 86

東名高速道路 88

日記 90

西伊豆の夏 95

高速動物 98

鳥と天狗 99

車と船と家 100

小学校五年の時 105

作家と作品

小島信夫 弱い結婚 113

なだ・いなだ れとると 115

木々康子 曼殊院から 116

竹西寛子 儀式 118

庄野潤三 紺野機業場 120

深沢七郎 庶民烈伝 122

倉橋由美子 わたしのなかのかれへ 123

吉行淳之介 暗室 127

小宮山遠 喪服 129

犬養道子 旧約聖書物語 131

旧約聖書と少年時代 133

モーリアック 内面の記録 135

瀬川三郎 ギリシャ風土と文化 137

ピエル・パオロ・パゾリーニ素描 139

チエーザレ・パヴェーゼの世界 143

《パルムの僧院》回想 149

フォークナーと暴力 153

志賀直哉の家 154

藤枝静男覚書 168

梅崎春生の二つの死 182

島尾敏雄について 186

埴谷雄高の夢 191

後記 199

小説のかたわら

仙厓の百丈野鴨子図

205

混沌と形成

207

言語感覚と言語哲学

215

なぜ港をうろつくか

218

福音書の理解

221

使徒行録

223

復活

224

ダヴィデ

227

体験と文学

229

なぜ書くか

234

一隅の想い

239

失われた旅

243

一人の意味

246

推敲

249

文藝の会

252

考える規準

253

遊弋

《リラの頃、カサブランカへ》について

254

《兄弟と友達》について

257

《黒馬に新しい日を》について

258

藤枝宿

265

少年期素描

267

サッカー・コーチ

269

解苦

271

長期欠席者

274

大森カトリック教会

276

渡仏前後

278

地中海岸の夜

281

エーゲ海の泊り

283

酒の想い出

285

謡曲

291

水と土地について

293

風信

296

豆本の世界 297

連合赤軍 299

富士と隔絶される人間性 299

北海道の友へ 306

旅とは 307

同時代

藤枝静男 小説四篇 313

庄司肇 貴婦人たち 322

三枝和子 処刑が行われている 324

古井由吉 杏子 行隠れ 327

阿部昭 司令の休暇 333

森内俊雄 幼き者は驢馬に乗って 338

辻邦生 北の岬 339

倉橋由美子 反悲劇 341

吉田知子 生きものたち 344

河野多恵子 骨の肉 345

北杜夫 酔いどれ船 347

島尾敏雄 夢の系列 349

井上光晴 小屋 350

丹羽正 魚の魔術 351

大庭みな子 魚の泪 352

饗庭孝男 石と光の思想 354

奥野健男 文学における原風景 356

檀一雄 来る日 去る日 358

吉行理恵詩集 361

高杉一郎の人間主義 364

後藤明生の倍音 365

大岡昇平とフィリピン体験 367

埴谷雄高考察 370

サド寸感 377

フォークナー断想 378

大系世界の美術 381

鳥海青児と闘牛 383

立原道造の脆さ 386

西東三鬼の幻 389

保高徳蔵の《文藝首都》 393

室生犀星とその母 394

志賀直哉の特質 396

後記

406

作品集後記——友人素描

409

解説

菅野昭正

421

一房の葡萄

私の文学観

読書遍歴

幼年時代の私は、作り話をする癖があった。記憶をたずねて見ると、最初は満で五歳の時であったようだ。ボクの本当の家は小川家ではなくて、別に生家があり、それは〈田舎の家〉だというお話だった。勿論、信じて語っていた。小川の家族が私にひどい仕打ちをしたなどということはないし、祖母などは、私に對する依怙蟲肩がはなはだしかった。だから、私の言分は家族には冷たかったことになる。二つ年上の姉などには、姉さんが〈田舎の家〉へ来たら青い蜜柑を上げる、とさえいったおぼえがある。

自分には出生の秘密がある、と考えたがる傾向は、かなり普遍的なことなのであろう。このような短文の中で、キリスト教の構図に言及するのはさしひかえるが、プラトンの父は神、ということもある。ローマの皇帝についてもこの種の伝説があるし、日本でも、中世の武士が、さかのぼって自らの系図を輝かしいものにしたがった。これについては私もいくつかの説明を読んだが、成程と思いつつも、結論は保留してある。ボクの実家は〈田舎の家〉というのだから、他愛ない。それについて喋るにしても、文章にすれば四行か五行程度のことであったろう。しかし、それにまつわる様々な想いが胸に湧いたことは、或る部分は具体的に、或る部分は気分として記憶している。内なる星雲といってもいい。恐らく、ここに小説の原型があるのだらう。そして、人間の信じたがる傾向が、物語を構想し、受容する基礎になっている、と私には思えるわけだ。

読書とは、私にとって、この〈星雲〉の中を覗くという意味になる。幼稚園児、小学生だった私にも、それはなみなみならぬこと、尽きない興味の淵と思えた。

似ている人は多いだろうが、〈家なき児〉などを読んでもらった。よく読んでくれたのは、姉の友達であった。彼女も読みたかったのか、我慢してそうしてくれたのか、当時の私には、問題ではなかった。ルミ少

年の家の暗い雰囲気……。夕方、母親がおいしい料理をこしらえてくれるというので楽しみにしていると、刑務所から義父が帰って来て、ご破算にしてしまう。跛の義父が杖で、葱、葱、といいながら、壁から葱の束を切って落とすところ。大道芸人の一座に売られて、セーヌ川に沿って旅をするところ。美しい舟、寒気と病氣と死、パリへのあこがれと幻滅など、かなりの部分を、私流に若干変貌させて、今でもそらんじている。《小公子》《小公女》もその気分につながっている。少女セーラが、人形を買おうとして店から店へ歩いて行く姿、粗末な屋根裏部屋で気高い想いを抱いて暮らす日々、等々。西洋に対する、手に触れられるほど具体的な幻想とでもいふべきであらうか。私は、こうした比類なき物語の作者の、エクトール・マローとかバーネットという名前をおぼえた。

それより他に、小川未明や濱田廣介の創作にも魅かれて、それが後に《少女の友》における川端康成につながって行く脈絡も私にはあるが、紙数の制限もあるので、ここでは省略しよう。

《家なき児》《小公子》《小公女》の想い出につながるのには、ベックリン、ターナーなどの画集だといっていだらう。随分唐突なことだが、私の個人的事情はそんな具合だった。ベックリンの《死の島》の複製は核で療養中の小学校五年の私にとって、《怖いもの》であった。ゆるぎない實在感があって、私の脳裡を離れないものとなった。微かな慰めの要素も、そこには含まれているようだったが……。そして、ターナーの海と船は、マイナスの空間ともいふべき仄暗い《死の島》から、一気に、その反面の空間へ、私を開放するものであった。いわば、物静かで男性的なうながしを、そこに私は感じた。当時は、そのままステイヴンズの《宝島》のさし絵ともなったし、後にはメルヴィルの《白鯨》の数々の場面が、直接間接に照応した。

忘れられない作家に、サー・ヘンリー・ライダー・ハーガードがある。《ソロモン王の洞窟》《シバ女王の秘密》など、これも今はもう手許から消えた本だが、内容は身近にある。射撃の名手アラン・コートターメン、それから、名前を忘れたが、王の血を引く黒人の青年などの、動作を見、声を聞くように思いながら読み進んだものだった。また、物語の舞台を示した地図も、いくら見ても見飽きなかった。特に、僭主のいる宮殿にいたる平原の道に、私は様々な関心を注いだ。それは激しい期待にそのかされた旅であって、作者